被虐待経験と内的作業モデルが表情の解釈バイアスに及ぼす影響

— 表情刺激の表出強度に着目して —

○松尾和弥¹・大浦真一¹・島 義弘²・稲垣(藤井) 勉²・福井義一³

(¹甲南大学大学院人文科学研究科・²鹿児島大学教育学系・³甲南大学文学部)

キーワード: 被虐待経験, 内的作業モデル, 解釈バイアス

Effects of childhood abuse and internal working models of attachment on interpretation bias for face: Focusing on strength of expressions

Kazuya MATSUO¹, Shin-ichi OURA¹, Yoshihiro SHIMA², Tsutomu INAGAKI-FUJII², and Yoshikazu FUKUI³

(¹Graduate School of Konan University, ²Kagoshima University, ³Konan University)

Key Words: childhood abuse, internal working model of attachment, interpretation bias

目 的

小児期に虐待のような逆境体験を経験した人々は、表情を誤って否定的に解釈することが分かっている (Pollak et al., 2000)。しかし、被虐待経験から否定的な解釈バイアスへの影響は、不安定な愛着の内的作業モデル (IWM) を統制することで消失する可能性が示唆されている (松尾, 2016)。そのため、被虐待経験者の解釈バイアスを検討する際には、しばしば IWM の影響も同時に検討されている (e.g., 松尾他, 2016)。

ところで、日常生活で出会う表情は常に最高出力で情動が表出されているわけではない。被虐待経験と IWM のいずれか一方と表情認知の関連を検討する研究では、表情刺激の表出強度を操作した検討が行われているものの (Fraleigh et al., 2006; Pollak et al., 2009)、被虐待経験と IWM を両方用いた研究では、何の情動を表出しているかが明らかな、表出強度が非常に高い表情刺激のみを用いていることが多い。そこで、本研究では、複数の表出強度からなる表情刺激を用いて、被虐待経験と IWM が解釈バイアスに及ぼす影響を検討した。

方 法

参加者 大学生 57 名 (男性 12 名, 女性 45 名: 平均年齢 18.93 歳, $SD = 1.13$) が実験に参加した。本研究は Fukui et al. (2017), Matsuo et al. (2017), 大浦他 (2017) の再分析である。

尺度構成 被虐待経験を測定するために、CATS (田辺, 1996, 2005) を用いて合計得点を被虐待経験得点とし、IWM を測定するために、ECR-GO (中尾・加藤, 2004) を用いて関係不安と関係回避の得点とした。

表情の情動認知課題 各情動が強く表れた表情 (喜び・悲しみ・恐怖・怒り) は表出強度 100%, ニュートラル表情は表出強度 0% であるとそれぞれみなし、各表情とニュートラル表情を合成することで、表出強度が 25・50・75% の表情刺激を

Figure 1 単純効果の検定の結果

作成した。5 段階の表出強度 (0・25・50・75・100%) からなる 4 種類 (喜び・悲しみ・恐怖・怒り) の表情刺激と 4 つの情動語 (喜び・悲しみ・恐怖・怒り) を組み合わせ、参加者に各表情にそれぞれの情動が表れていた程度を 0 から 4 の 5 件法で評定してもらった。各情動の解釈バイアスの指標には、誤検出の程度を測定する組み合わせ (e.g., 喜び, 恐怖, 怒りの表情に対し、「悲しみ」の評定を行う場合を「悲しみの誤検出」を測定する組み合わせとする) で得られた評定値を使用し、それらを表出強度別に平均することで分析に使用した。

結 果

各情動の解釈バイアスを応答変数とし、表出強度をレベル 1 の説明変数、被虐待経験と関係不安・回避、および表出強度と被虐待経験、関係不安・回避の交互作用項をレベル 2 の説明変数とした階層線形モデルにより分析を行った (Table 1)。喜びの解釈バイアスはモデルが収束しなかったため、Table 1 への記載を省略した。表出強度は悲しみと恐怖、関係不安は恐怖と怒りの解釈バイアスを高めていた。さらに、恐怖の解釈バイアスに対して、表出強度×被虐待経験のクロス水準交互作用が有意であった。単純効果の検定の結果、被虐待経験の多い者は少ない者に比べ、恐怖の解釈バイアスに対する表出強度の効果が弱かった (Figure 1)。

考 察

情動の表出強度が高まるにつれて、否定的な解釈バイアスも高まることが確認されたが、関係不安が高い者は、表出強度に関係なく否定的な解釈バイアスを示していた。関係不安が高い者は、他者から見捨てられることへの極度の不安から、否定的な情動を読み取りやすい (金政, 2005)。そのため、表出強度の低い表情でもより否定的に捉えていたと考えられる。それに対し、被虐待経験者は、恐怖から注意を背けることが難しく、それへの鋭敏化が生じているため、むしろ恐怖の解釈バイアスが少なくといった報告もある (Suzuki et al., 2015)。本研究でもそのような鋭敏化が原因で、被虐待経験者では、表出強度から恐怖の解釈バイアスへの影響が弱かったのかもしれない。

Table 1 解釈バイアスを応答変数とした階層線形モデルの結果

	悲しみ		恐怖		怒り	
	Coefficient	SE	Coefficient	SE	Coefficient	SE
レベル1						
切片	0.97 ***	0.08	0.79 ***	0.07	0.95 ***	0.08
表出強度	-0.04 *	0.02	0.13 ***	0.02	0.00	0.02
レベル2						
被虐待経験	0.08	0.17	0.12	0.16	0.13	0.18
関係不安	0.00	0.00	0.01 **	0.00	0.01 **	0.00
関係回避	0.00	0.01	0.00	0.01	0.00	0.01
表出強度 × 被虐待経験	-0.05	0.05	-0.08 †	0.05	-0.07	0.05
表出強度 × 関係不安	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
表出強度 × 関係回避	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
変量効果						
切片	0.24 ***	0.07	0.19 **	0.06	0.32 ***	0.07
表出強度	0.01 **	0.01	0.02 **	0.01	0.02 ***	0.00

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$